

# 嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞 / 第37号 / 1998年(平成10年)4月発行(年3回発行)  
 ・発行所=社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1-30-9 (〒156-0055)  
 TEL 03-3426-2323  
 ・発行人=石井哲夫 ・編集人=小野直人

## 「アスペの会」を巡って

杉山 登志郎

「アスペの会」とは、高機能広汎性発達障害の自助グループである。共同研究者の辻井正次氏(聖徳学園岐阜教育大学)と共に、四年前から会の活動を始めた。私の側の動機は、就労研究の中で高機能者の適応の難しさが示され、衝撃を受けたことである。発足当初は十一名程度の小さなグループであった。ところが会を重ねるにつれ、アスペの会はどんどん人数が増えて行った。会員の大供給源である齊藤久子先生(名古屋市立大学)や私の外来に通っていたお子さんだけでなく、中京地区で児童外来を開いている先生方が口コミで会のことを知り、ご自分の外来に来ていた、そして正直に書くと、どう指導したらよいか困っていたアスペの子ども達を、一人二人と紹介して来られたのである。私達は初めは気楽に考えていた。辻井氏も、「百人までは大丈夫です。」と鷹揚に構えていたのであるが、次第に本気で人数の心配をしなくてはならなくなつた。そして今年ついに、登録数は限界の百人を越えようとしている。会自体にはいつも全員が参加するわけではないが、六十名から八十名を越えるアスペの子どもおよび青年が集まり、賑やかに一日を過ごすのであるから壯觀である。アスペの子がこんなに沢山居るということに、正直なところ我々は驚かされたのである。

その一方で、きちんとした診断も無く、また互いに助け合う仲間も無く、孤独な苦闘をしているアスペの人々が沢山居ることも分かってきた。そもそも学習障害と言われる児童の約半分が広汎性発達障害の児童であることは周知の事実である。インターネットにアス

ペの会のホームページを作った結果、全国、全世界から「私もアスペです。」という手紙が来ることになった。どの手紙も、アスペは普遍的だと唸らされるものが多い一方、色々と苦労をしているに違いない内容が訴えられていて、何とかならないものかと胸が痛んだ。

私自身は、アスペの会が出来てから、子ども達への対応が随分と進んだように感じている。私達の理解の進展もさることながら、ご両親そして本人が色々な問題に対して互いの経験を踏まえて情報を出し合い、支え合って行けることが貴重である。この様に、小学校やそれ以前から我々によりフォローアップを受けてきた児童、青年においては問題行動への対応が目鼻が付いてきたのに比べ、他方、大学生やそれ以上の年齢で初めて登場した青年の場合は、同じ診断なのかと思えるほど対応が困難であることも分かってきた。不適応と被害念慮が悪循環となり、さらに不快な体験がタイムスリップによる連鎖を紡ぎだしてしまい、容易に妥協が出来ない構造となってしまっているのである。当然とはいえ、高機能広汎性発達障害の場合も、より早期からの治療や対応が有効であることをあらためて認識することとなった。

私は、「アスペの会」が今後、次第に各々の地域で開かれるようになり、その本来の目的である自助会に発展して行って欲しいと願っている。そして、「アスペの会」がもっと全国に広がり、互いに支え合うことが出来るようになればと念じている。

(静岡大学教育学部)

この嬉泉新聞の刊行が遅れることが、関係者に対する貢献でなくなっていることをお詫びしたい。私の担当している小論文からして時代遅れにならなければよいがと自戒しているこの頃である。最近の社会福祉の入所施設は、地域活動の興隆によって、その機能の再考が求められてきていることを感じている。地域と施設を結ぶ社会福祉サービスの展開が望まれているはずであるのだが、この声かけをしている人が見あたらぬ。夫子自らやれと言わればやらなければならぬが、社会福祉の現場と教育との関係で仕事をしている身としては、うつかりする二兎を追うものは一兎も得ずといふことになりかねない。

しかし基本的には、国の社会福祉行政改革はよくわかるし、本法人においてもそううたる専門家揃いの理事者の先生方が揃つておられるので、今更弁を弄じる迄もないが、この時代を生き抜いていく社会福祉施設の設置経営は、真に利用者から喜ばれる施設運営を行うことが必要なのである。社会福祉施設へと転換させる努力を倾注することを求めるべきが、実

とによって、嬉泉の活動が情報として関係者に対する貢献でなくなっていることをお詫びしたい。私の担当している小論文からして時代遅れにならなければよいがと自戒しているこの頃である。最近の社会福祉の入所施設は、地域活動の興隆によって、その機能の再考が求められてきていることを感じている。地域と施設を結ぶ社会福祉サービスの展開が望まれているはずであるのだが、この声かけをしている人が見あたらぬ。夫子自らやれと言わればやらなければならぬが、社会福祉の現場と教育との関係で仕事をしている身としては、うつかりする二兎を追うものは一兎も得ずといふことになりかねない。

され既に十号となつた。この間のミニコミ誌の内容に関する感想を述べれば、概して管理運営における長老者に対する風当たりが強いたる長老者に対する風当たりが強い。特に私が信頼し登用してきた古い人でも、先輩として若い人に対して教育者としての力量と配慮に欠ける状態を感じている。自分自身を振り返ってみてもうなづけることは、運営管理責任は組織的な目配りと不断の努力が必要とされているので、どうしても抜けることが出てくる。先輩職員の立場

は、組織人としての自觉とよい人間関係を目指して、後輩と共に相互通報しあう関係ができていない。またこのミニコミ誌は、そのうちに外部の人、たとえば保護者も見てもらおうと考えている。我々は、まず積極的に談論風発を望まなければならない。「嬉泉の新聞」や「おたより」では投稿できにくい仕組みがあるというので、職員のミニコミ誌の「嬉泉のC.I.(言いたいこと聞きたいこと)」を刊行した。社会福祉法人傘下の事業所に担当員をおいて、編集責任を小野多規子園長にお願いすることにした。これが既に月一回の割で出

は、組織人としての自觉とよい人間関係を目指して、後輩と共に相互通報しあう関係ができていない。そのため、自分たちが純粹で自己感覚を優先する人が多いだけに、他人に対して自分が強くなるのである。これを何とかしようと考えたのが、このミニコミ誌の発行なのである。

施設経営の創造性(その二十八) 石井哲夫

され既に十号となつた。この間のミニコミ誌の内容に関する感想を述べれば、概して管理運営における長老者に対する風当たりが強い。特に私が信頼し登用してきた古い人でも、先輩として若い人に対して教育者としての力量と配慮に欠ける状態を感じている。自分自身を振り返ってみてもうなづけることは、運営管理責任は組織的な目配りと不断の努力が必要とされているので、どうしても抜けることが出てくる。先輩職員の立場

は、組織人としての自觉とよい人間関係を目指して、後輩と共に相互通報しあう関係ができていない。そのため、自分たちが純粹で自己感覚を優先する人が多いだけに、他人に対して自分が強くなるのである。これを何とかしようと考えたのが、このミニコミ誌の発行なのである。

され既に十号となつた。この間のミニコミ誌の内容に関する感想を述べれば、概して管理運営における長老者に対する風当たりが強い。特に私が信頼し登用してきた古い人でも、先輩として若い人に対して教育者としての力量と配慮に欠ける状態を感じている。自分自身を振り返ってみてもうなづけることは、運営管理責任は組織的な目配りと不断の努力が必要とされているので、どうしても抜けることが出てくる。先輩職員の立場

は、組織人としての自觉とよい人間関係を目指して、後輩と共に相互通報しあう関係ができていない。そのため、自分たちが純粹で自己感覚を優先する人が多いだけに、他人に対して自分が強くなるのである。これを何とかしようと考えたのが、このミニコミ誌の発行なのである。

され既に十号となつた。この間のミニコミ誌の内容に関する感想を述べれば、概して管理運営における長老者に対する風当たりが強い。特に私が信頼し登用してきた古い人でも、先輩として若い人に対して教育者としての力量と配慮に欠ける状態を感じている。自分自身を振り返ってみてもうなづけることは、運営管理責任は組織的な目配りと不断の努力が必要とされているので、どうしても抜けることが出てくる。先輩職員の立場

は、組織人としての自觉とよい人間関係を目指して、後輩と共に相互通報しあう関係ができていない。そのため、自分たちが純粹で自己感覚を優先する人が多いだけに、他人に対して自分が強くなるのである。これを何とかしようと考えたのが、このミニコミ誌の発行なのである。

# 私たちの じーど

## 須藤福祉センター各事業所からの報告

### 地域療育相談会

柳 淳一

袖ヶ浦ひかりの学園に地域事業推進室が設置されて二年半が経過しました。この推進室は、千葉県全域を対象に地域療育相談事業を通して袖ヶ浦のびる・ひかりの学園の自閉症施設としての専門性を提供また活用して頂く為に、地域（利用者）と両学園間をコーディネイトする役割を担っています。

現在の相談事業のメニューは、施設地域療育事業の制度を活用し千葉県並びに千葉市と委託契約を結び、両学園が心身障害児（者）巡回療育等相談事業、のびる学園が心身障害児短期療育事業、ひかりの学園が精神薄弱者生活能力訓練事業を実施しています。またそれに加え学園独自の事業として、個別療育セッションを行つていま

す。療育相談は年々そのニーズが増え、実施年度当初より積極的な広報活動はしていませんでしたが、現在では「施設業務の余力を活用した事業」と言う位置付けの中では追いつかないほど相談ケースが増えていた傾向にあります。

相談の内容は、対象が自閉症と言う特殊な障害と言うこともあり、障害福祉制度上の相談以前に、まず親御さん自身の自閉性障害への理解から始める必要があり、お子さんの示す問題行動の意味することを考へると、自閉症という障害を広く社会に認知してもらい、彼らの生涯に渡つて療育が受けられるような地域に根差した専門機関「自閉症センター」を設置できるような制度の裏付けが必要ではないかと思ひます。

今後とも地域に根差し、嬉泉の特殊性を生かした相談事業を展開して行きたいと思つています。

（袖ヶ浦地域事業推進室）



重ねるにつれて、親御さんの理解（利用者に対する受け止め方）が進み、家庭生活の中で状態改善が見られるケースもあります。相談ケースの年齢層は、二歳のお子さんから思春期を迎えた青年、三十歳間近の大人と多岐に渡り、ケースの障害特性もロウ・ファンクションまでからハイ・ファンクションまでと直面する問題も個々のケースによつて様々です。

私が相談事業の担当として関わるようになつて感じていることは、

「就学前後の人々の為の専門機関がこんなにも少ないので」と言つうことです。早期発見からその障害の受け止め方と関わり方、就学後には受け止め方と関わり方、就学後には至つては、地域の作業所等で適応できず、在宅を余儀なくされ家庭内暴力に至る、或いは知的には高いが強い自閉性を示し社会適応の難しい高機能自閉症者の問題。全て施設内療育だけではなく社会問題として捉えて行かなければいけないと感じています。

今後の事業展開の課題としては、両学園の相談事業が更に円滑に進むようシナジーの構築、小城ではなく全県を対象とした高機能者の

ためのデイ・サービスの実現等ま

た広義な視点では、自閉症にまつ

わる福祉施設の向上ということを

考へると、自閉症という障害を広く社会に認知してもらい、彼らの

生涯に渡つて療育が受けられるよ

うな地域に根差した専門機関「自

閉症センター」を設置できるよう

な制度の裏付けが必要ではないか

と思ひます。

今後とも地域に根差し、嬉泉の特殊性を生かした相談事業を展開して行きたいと思つています。

## 職員の思い

大鷹 裕子

いつの間にか就職してもう五年になりました。少しずつ求められる事や責任も増えてきて、最近では、毎日、『できるかなあ、責任が重いなあ。』と感じながら仕事をしています。

この間何人かの実習生と話すをする機会がありました。その中で、『いろいろな考え方をする人がいるんだ。』ということを実感したのはもちろんですが、実習生と話をすること、自分自身に気付かされたといった経験を初めてしました。例えば、自分が日頃利用者に関わる時に大切にしていくことを実習生に話すことで、自分の方性を再確認したり、また逆に、『自分はこんなに立派なことを言つていいけれど、実際はでていかないじゃないか、口先だけじゃないか。』という、自分にとつてあまり認めたくないことがあからさまになつたりしました。また、実習生の考え方と私自身の考え方とが

少し違つていると、その言葉を受け止め切れなくなりました。  
『そこでしっかりと人の気持ちを受け止められない自分も情けない。』と思つたりもしました。

私が今やつている仕事は、利用者に対する療育的援助ですが、それはつまり自分自身の長所、短所をしつかり見つめ、自分自身の幅を広げていくことが大切になつくると思っています。そういう意味でも、今回、実習生と話しがで

き、自分の弱い部分が表面化したこと、私にとってはとてもいい勉強になつたと言えるのですが、本心では、『やっぱりこの仕事はキツイなあ。』と思つてしまいま

す。

今回に限らず、そういう時に心

の支えになるのが、同じ仕事をし

ている仲間であり、同じ時間を過

ごしている利用者です。特に利用

者が、目と目を合わせてニッコリ

微笑んでくれると、それだけで心

が和み、嬉しくなります。そんな

ことがあると、『こういう喜びを

知ることができてやっぱり幸せだ

な。私はこの微笑みからは逃れら

れないなあ。』となんだか感慨深く思つています。

(赤塚福祉園)

霧生 弘長

「もう駄目かもしない。」

一日の仕事を終えてそう思うことがあります。

「四年と少しの経験で、自分に

も力が付いてきた。後輩も増えて

きて、あまり格好悪いところは見

せられない。』そんな思いを持ち

ながら利用者と関わっていると、

昨日とは違う態度を示す彼らに苛

立つている自分がいます。上司か

らスーパービジョンがあるのだけ

れども熱くなつてゐる自分は、

『いつもは違うのに。』と、素直に

なれば、「四年余りの自分の経験

に頼つて前に進む事ができない。』

すると、「この仕事は自分には向い

ていない。』という気持ちが湧いて

くるのです。

十九の春上京した時には、まさ

か自分が福祉の仕事をするとは思

つてもいませんでした。しかし、思

い出でて、「ケンは花火嫌いなの。」

だから遠くでやつてね。』とすまな

そうに僕らに頭を下げました。そ

んなおばちゃんを見ながら、「ニコ

ニコして私の母に抱き付くケンち

ゃんがそんな事をするの?」と思

議に思いました。

「もう駄目かも……。」と思う時

その不思議な人と自分が、今一緒に過ごしていることに妙な繋がりを感じているのです。「もう少しこの妙な繋がりの中に身を置こう。

まだまだ若い!」と思う今日この頃です。

(のびる学園)

し、なんら戸惑う事もなく、一緒に暮らすことができました。しかし、ケンちゃんには、何か違う物を感じました。その当時、私がまだ小学校に入りたての頃、ケンちゃんは、年齢は分からぬが体格は大人と一緒にぐらいました。そんなケンちゃんが、「ミッコちゃん好き!」と言つて、私の母に抱き付く様は、子ども心に変な人だなど思いました。ケンちゃんは、益と正月にしかその家にいませんでした。ある年の益に、近くの空き地でロケット花火をしていると、ガチャーン! とガラスの割れる音がしました。するとおばちゃんが出てきて、「ケンは花火嫌いなの。」

だから遠くでやつてね。』とすまなうに僕らに頭を下げました。そんなおばちゃんを見ながら、「ニコニコして私の母に抱き付くケンちゃんがそんな事をするの?」と思議に思いました。

「もう駄目かも……。」と思う時、その不思議な人と自分が、今一緒に過ごしていることに妙な繋がりを感じているのです。「もう少しこの妙な繋がりの中に身を置こう。まだまだ若い!」と思う今日この頃です。

## 地域に支えられて

地域の企業との関わり

畠田 順三

平成五年の開設以来、地域の幾つかの企業に支えられてきました。お陰で順調に工賃支給実績も伸びてきています。そんな赤塚福祉園授産施設（はばたきグループ）と地域の企業との関係を綴つて見ます。

私がはばたきグループに関わるようになつた平成六年春、四、五月の二か月、ほぼ毎日のように区内の事業所を訪問して歩きました。そんな苦労の結果、区内弥生町に本社がある寿堂紙製品工業（株）という封筒類を主に製造している会社と出会いました。板橋区内の事業所としては大手で、下請けや内職さんを沢山抱えている所でした。年末の販売に向けてお年玉袋

をセットする仕事を試しにいただき、スタートしました。

当時の職員スタッフが大変気を遣つて利用者の作業チェックをしてくれたことを覚えていますが、何しろ仕事ですからきちんとした結果を出さないと次の仕事がもらえないません。……そんな風に始めた関係がずっと続くうちに不思議なものであつちこつちから仕事の依頼が舞い込んでくるようになります。実績が生み出す産物なのでしょう、年が明けて春先に尋ね歩いた会社から依頼が来たりしました。

その中には養護学校に通うお子さんをお持ちの担当者の方もいらつしやいました。「こんな仕事、できるかなあ？」と親身になつて配慮していただいています。

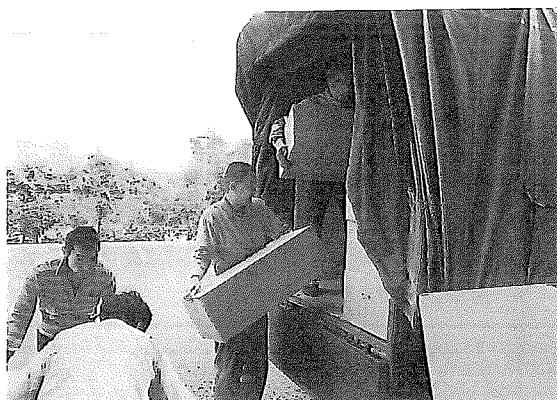
平成六年、七年、八年と順調に

受注先も増え利用者の作業意欲も向上していくなか、八年の年度末、小茂根福祉園の授産施設に通う浅野肇さんという方が突然訪問されました。

法人の古手の職員が知っている方で、彼が現在行つてている仕事（職場実習で佐藤産業という紙袋を製造している会社に通つて）を持ち込んでくれました。折角の

福祉園の利用者とも気軽に声を掛け合い、「ここはこうやるんですよ」と親切に教えてくれたりもしています。

そんな彼の働く姿を見て、「俺も会社に行つてみたいな……。」と言う利用者も出てきています。はばたきグループの場合、自主通園ということでも地域の方々との様々な触れ合いがあります。いずれにしても地域に支えられて今日も明日も「おしゃとにがんばる。」はばたきの利用者です。



（赤塚福祉園・授産施設）

ご好意ですので後日会社と連絡を取り受注作業に加えて見ました。今年度四月から作業を始めてみたところ、今までの各作業には入りにくかった利用者が積極的に加わるようになりました、結果として大助かりしています。その後もトラックの助手として材料の搬入などに時々やってきて、「仕事の具合はどう？」と気にしてくれたり、赤塚

（本文は、畠田順三さんによるもの）

## 嬉泉の出来事

（全 体）

バザーを終えて

後に残るはゴミの山

子どもの生活研究所の一年行事の中で、最も大きな比重を占める「嬉泉バザー」が無事終わりました。お陰様で当日は、例年なく暖かい陽射しの中、大勢のお客様を迎えて、約400万円の収益をあげることができました。皆様の多大なるご協力、本当にありがとうございました。

ところで、昨年からの東京都の事業所のゴミ処理有料化に伴い、バザーでのゴミ処理も問題となつてきました。なにしろ、お客様と職員、お手伝いの方々が、この狭い子どもの生活研究所の中で一日二日間を暮らすですから、やはりゴミの量も尋常ではありません

子供たちの生活研究所の一年行事の中で、最も大きな比重を占める「嬉泉バザー」が無事終わりました。お陰様で当日は、例年なく暖かい陽射しの中、大勢のお客様を迎えて、約400万円の収益をあげることができました。皆様の多大なるご協力、本当にありがとうございました。

今回のバザーは、「生ゴミ」「燃えないゴミ」、「燃えるゴミ」、「缶・ビン」というように4種類に分けましたが、当日用の4種に色分けされたゴミ箱の群を見ながら、「一体どれくらいの人達がきちんと分別してくれるのだろうか。」などと思案していました。

しかしながら、当日はゴミの分

別をし直すことはほとんどなく、ゴミ問題に対する意識の高さを感じました。

て、次々と回収していつても、分別をし直すことはほとんどなく、ゴミ問題に対する意識の高さを感じました。

（袖ヶ浦）

袖ヶ浦の芸術活動について

平成九年一月に、袖ヶ浦ひかりの学園の持田想一さんと浜ノ園武生さんの絵画が「障害者アートバンク」に登録され、持田さんは平成九年度の「アサヒビール奨励賞」（今後活躍が期待される作家に贈られる）を受賞しました。

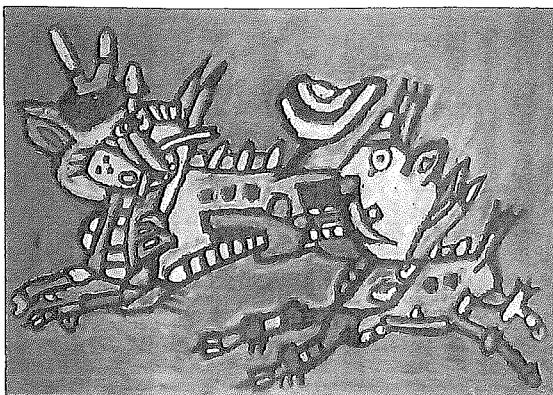
また、先日開催された、第十二回障害者総合美術展（東京都主催）において、持田さんの絵画『麒麟』が入選を果しました。

この結果は、彼らの「鮮烈な表現力」に対する評価であると共に、袖ヶ浦ひかりの学園において行われている選択的作業指導中の絵画創作活動に対しても与えられた一つの社会的評価であると思われます。

ところで、芸術においては、表現者に障害があるのかないのかということは重要な問題ではなく、表現力があるかないかというこそが重要です。彼らが鮮烈な表現力を放っているのは、本人が持っている表現力の「根



（今西 篤子）



底的な素晴らしいが、純粹に現れているからに違いないと思ひます。

最近の袖ヶ浦では、芸術活動を通した社会参加という気運が高まつてきました。前述の「アートバンク」や「総合美術展」への出品がその具体的な活動です。これらはただ単に、作品を世に送り出すということだけではなく、芸術活動を通して、利用者と社会、施設

と社会との交流を、図ろうというものです。

彼らの「鮮烈な表現力」と、今

後期待される活躍は、交流の輪をますます広げていくものと思いますし、権威化してしまった芸術に一石を投じることになるだろうと信じてやみません。(一尾弘志)

### 赤塚

#### 宿泊旅行について

赤塚福祉園では、九月から十月にかけて、利用者の宿泊旅行を実施しました。赤塚福祉園は通所の授産と更生で五つのグループになっており、それぞれに「一泊三日、延べ十五日間を引率責任者として同行しました。私は、今年異動してきた人間で、福祉園の宿泊旅行は未知数でしたが、各グループともこの行事に関しては、年度の初めから実施計画を始めており、現

地下見をし、打ち合わせを重ねて実施した甲斐あって、無事に終了する事ができました。

自閉症と重度知的障害の利用者のグループ「かがやき」は、伊豆

急踊り子に乗つて弓ヶ浜へ。同様の障害ながらも比較的集団行動の

とれる「ほほえみ」は、スープーあさきで山梨石和温泉。重度重複障害者の「あすなろⅡ」は、葛西

臨海水族園とディズニーランド。

同じく「あすなろⅠ」は、静岡の御殿場へ。そして授産の「はばたき」は、青梅青年の家。交通手段も宿泊先も各種各様。利用者が意

思表示できるグループは利用者と職員の委員会を作つて検討し、そ

うでないグループは利用者が楽しめそうな内容をああだこうだと議論しながら計画してきました。

発達障害の方も肢体不自由の方も「一泊三日の宿泊旅行となると、

様々な条件で制約されることが多く、なかなか実現できるものではありません。それだけに、この機

会に、日常の生活から離れ、彼等にとつてそこで十分樂しめて充実した経験となるよう職員は一生懸命でした。また一般の人が旅行するのと同様の経験ができるような配慮もしました。それが一人一人

の社会経験の広がりとなり自信につながつていけるといいと願いま

した。

また、職員側から見ると、赤塚

福祉園は通所の施設で日中の利用者の姿しか見ていないので、二十四時間のトータルな利用者の生活

を共にする視点に欠けています。

特に家庭でご苦労されている利用者に関しては、その辺の実績を経験できるいい機会でもありました。

宿泊先はほとんどが公共の施設で、受入れがとても良く、特別に

車椅子用のスロープを作つてくれたり、マイクロバスで送ってくれたり、あるいは特別な差し入れをして下さつたりとどこも歓迎してくれました。交通機関や関連施設もバリアフリーが少しずつ進んでいます。山梨のブドウ園のおじさんおばさんたちのやさしい応対は印象的でした。

障害を持つ人達がどんどん町に出、社会に出掛け、一般市民の人達の心のバリアーが取り除かれ、「障害者がいて当たり前」の社会」という意識が少しづつでもひろがつてほしいと願いつつ、こうした旅

行だけでなく、日々の活動に取り組んでいます。

(友田 篤)

# ひかりのタイムス

独立第31号

## AUTOSインタビュー

石井啓さんに聞く。

インタビュアー 山岸裕

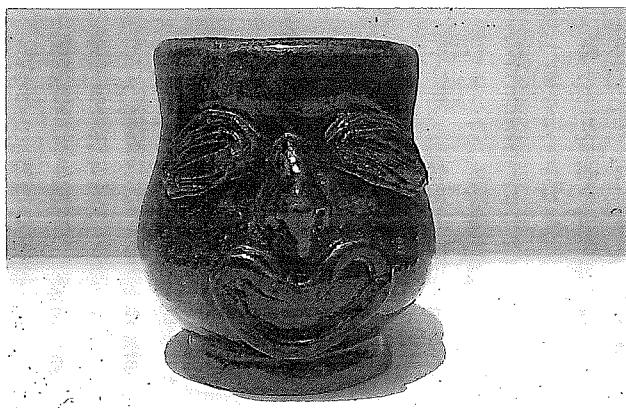
は。

石井「石井所長の発案で赤塚福  
祉園とか、子ぐま学園、袖ヶ浦の  
学園とかの作品は芸術性が高く、身  
内だけに頼らぬ評価をして、広く  
世に問うてみたい。一番大きな動  
機。」

山岸「活動はどういう事を。」

石井「作業指導の中の創作活動  
自体を世に出していく。それを總  
称してAUTOS。具体的に企画  
としてあるのは展覧会（陶芸と絵  
画）。これは場所と月日も決まって  
います。場所は銀座のギャラリー  
青羅。」

山岸「それが終わった後は、  
石井「並行して、作品集の出版、  
出版時期を同時並行して展覧会の  
会場で売りたいという事。」



山岸「本の内容は。」  
石井「内容は絵画作品と、陶芸  
作品の写真集と作者のポートレー  
トが入ります。若手のアーティス  
トと石井所長の対談が入り自閉症  
の事を芸術を通して世の中の人々が、  
分かればいいと思います。本は小  
学館から出版されます。」

山岸「自閉症を知らない若手ア  
ーティストと石井所長の対談をす  
るのは。」

石井「自閉症を知らない若手ア  
ーティストは自閉症の芸術を評  
価する第三者の役割を果たすと同  
時に何も知らない読者の役割とし  
て率直な疑問を石井所長にぶつけ  
ていく。その2つの役割を担う。」

山岸「出版も含めてどのような  
ルートで実現出来たのか。」

石井「こういう本や展覧会を借り  
られたのは、障害者芸術文化協  
会（以下芸文協と略す）。障害者  
芸術を世に広める団体。ウチと同  
じ様に展覧会を出したり、コンク  
ールを出したりする。ウチは残念  
ながらコンクールに入賞はしてい  
ない。ウチの職員の神保さんが関  
わりを持っていて人脉を広げてい  
ます。場所は銀座のギャラリー  
青羅。」

山岸「それが終わったら後は、  
石井「並行して、作品集の出版、  
出版時期を同時並行して展覧会の  
会場で売りたいという事。」

石井「写真家として小野さんと  
いう人が芸文協で関わって神保さ  
んと知り合った。ライターの熊谷さ  
んと芸文協で神保さんと知り合う。」

山岸「写真撮影を学園の陶芸室  
でした時の5人のアーティストの  
反応は。」

石井「緊張していました。写真  
を撮る方もプロなので自然に撮つ  
いくようにした。利用者は、今の所  
不快な刺激を感じないようだ。」

山岸「保護者の了解は。」  
石井「お名前を出したり、顔を  
掲載したり了解を求めた。」

山岸「今後の展開は。」  
石井「その先は展覧会をやりた  
い。貸してくれるギャラリーがな  
いので、リトグラフや、絵葉書・  
複製品を展示販売をする。作品そ  
のものを売る事を考えている。」

山岸「あんまり安売りをしたくない。  
世間的な評価がある程度出てきた  
らこれらの事をやる。」

石井「芸術活動を通して利用者  
と施設と法人の社会参加を進める。」

山岸「AUTOSのコンセプト。  
ある意味での社会福祉法人として  
狭い世界にいたので、こういう援  
助も出来るんだ。型にはまつたサ  
ービスを提供するだけじゃなくこ  
ういう形もあるんだ。」